

機関番号：62618

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720168

研究課題名（和文）20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究

研究課題名（英文）Study on Shift of the Loanwords to Basic Words in the Japanese Newspaper Vocabulary in the Second Half of the 20th Century

研究代表者

金 愛蘭（KIM ERAN）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・時空間変異研究系

プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：90466227

研究成果の概要（和文）：20 世紀後半の新聞記事を資料とした自作の大規模な通時的新聞コーパス（総文字数約 1,700 万字）を用いて、「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」現象の実態およびその要因について記述した。具体的には、20 世紀後半に基本語化した語を抽出するとともに、外来語を含む類義語体系の量的な変化を調査し、類型化を行なった。また、要因については、語彙論的な検討のほか、「テキスト構成機能」と呼ばれる諸機能についても検討を行なった。

研究成果の概要（英文）：This paper describes "Shift of Abstract Loanwords to Basic Vocabulary" and its factor, using a diachronic corpus (The total character counts are about 17 million characters) of newspaper articles from the second half of the 20th century that I created myself. Specifically, I made a list of the loanwords that shifted to basic vocabulary in the second half of the 20th century, and performed a quantitative analysis classifying the loanwords in terms of their effects on the Japanese synonym system. The paper further examines the various function referred to as "Discourse Function" and includes a lexical analysis.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：外来語、基本語彙、基本語化、類義語、コーパス、新聞、計量言語学

1. 研究開始当初の背景

従来の外来語研究は、外来語をいつまでも、周辺のなもの、ものめずらしいもの、分かりにくいもの、日本語を乱すものとしてとらえ、その「よそ者の」な性格・特徴を明らかにしようとしてきた。しかし、いまや、外来語は、和語や漢語が担っていた基本語彙の中に少

なからず入り込み、日本語の語彙をその中心部においても変えようとしてつつある。とくに、抽象的な外来語の基本語化は、生活の近代化という言語外的な条件によって基本語化したと考えられる具体名詞の外来語と違って、今まで和語や漢語が担っていた文章・談話の骨組みを成す語群に外来語が進出している

ことを意味している。

2. 研究の目的

本研究では、20世紀後半の新聞記事を資料として「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」現象の実態を記述し、日本語の語彙に、抽象的な外来語の基本語化という現象が、和語や漢語の類義語があるにもかかわらず、なぜ生じたのか、を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)20世紀後半の新聞記事を電子化した通時的なコーパスを、拡充・整備する。外来語とその(和語や漢語の)類義語の用例をより容易かつ正確に抽出できるようにするためには、新聞記事のコーパス化が必要である。すでに、1950年から2000年までの『毎日新聞縮刷版』から、10年おきに、それぞれ毎月2日分(5日と25日)、各年24日分の朝刊全紙面(地方版・テレビ欄等の紙面および広告は除く)の記事を、プレーン・コーパス化していたが、それを毎月3日分(15日を加える)とし、各年36日分に拡充する。なお、『毎日新聞』を資料とするのは、1991年以降の電子化コーパスが利用できるからであり、全紙面の記事をとるのは、用例の偏りを避けるためである。

(2)上記コーパスに語彙調査を施し、20世紀後半に基本語化したと考えられる外来語を収集する。作成したプレーンコーパスに対して、形態素解析プログラムを用いた語彙調査を行ない、その結果、得られた外来語の経年的な使用状況の変化をもとに、20世紀後半の新聞で基本語化したとみてよい抽象的な外来語を見出す。

(3)いくつかの抽象的な外来語をとりあげ、その基本語化とそれに伴う類義語体系の変化の具体的な様相を、上記コーパスを利用して、各語の意味・用法の側面から通時的・計量的に記述する。

(4)それらの調査結果をもとに、抽象的な外来語の基本語化が、和語や漢語の類義語があるにもかかわらず、なぜ生じたのかを明らかにし、その過程を理論化する。

4. 研究成果

【通時的新聞コーパスの拡充・整備】

1950年から2000年まで10年おきに各年36日分の記事を収めた通時的新聞コーパス(総文字数約1,700万字)を完成させた。

1950年から2000年までほぼ10年おきの『毎日新聞』を用いて、毎月3日分(5日・15日・25日)、各年36日分の朝刊全紙面の記事を、1950年・60年・70年・80年は『縮

刷版』からテキスト入力し、1991年と2000年については『CD-毎日新聞データ集』を利用して該当部分を抽出し、プレーンコーパスを作成した。基本的には、広告を除く記事を対象とするが、ラテ欄、都内版、地方版をはじめ、俳句・川柳、証券・株、人事、決算、訃告、競馬などは除外した。抽出比率は、約10分の1である。作成されたコーパスの規模は、以下の表(空白を含む)の通り。

年	文字数
1950	793,692
1960	2,208,396
1970	3,183,297
1980	3,218,737
1991	3,265,786
2000	3,994,933
合計	16,664,841

データの規模は、全体で1,700万字弱となり、ページ数の極端に少なかった1950年(原則として一日2ページ、休日・祝日のみ4ページ)、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ300万字程度となり、20世紀後半の通時的な新聞コーパスとしては、他に例を見ない大規模なコーパスを構築することができた。

【基本語化した外来語のリスト化】

作成したプレーンコーパスに対して形態素解析(解析器には「MeCab(和布蕪)」、解析辞書には語種情報が付与される「UniDic 1.3.8」を使用)を行ない、その結果に基づき簡易的な語彙調査を行なった。その後、コーパスから得られた個々の外来語について、同語異語判別を行なったうえで、出現率を算出し、雑誌『中央公論』の経年的語彙調査(国立国語研究所1987)に従って、増加傾向係数を算出した。着実に増加した語がすべて基本語化したとは言えないが、高頻度で、安定して使用されるということは、20世紀後半を通して基本語化してきている可能性が高いと想定し、そのリストを作成した。リストの詳細は、金愛蘭(2011、業績欄の図書①)を参照されたい。

【類義語体系の変化に関する量的調査】

外来語が基本語化することによって、その類義語体系がいかに変化してきたかを調査すべく、上記で算出された増加傾向係数の大きい語について、該当の外来語を含むその類義語について、その使用頻度の変化を調査した。

方法は、『使い方の分かる類語例解辞典新装版』にあり、かつ、同辞典でその類義語をあげているものに限って、外来語(抽象的な意味をあらわす語のみ)およびその類義語の、

通時的新聞コーパスにおける使用量の変動を調査した。

その結果、大きく、①外来語が顕著に増加して類義語を上回るもの（イメージ・タイプ・コピー・コミュニケーション・アドバイス・テーマ・イベントなど）、②外来語が増加はするものの、類義語を上回るには至らず、それに近づくもの（スペース・クレーム・ルール・パワー・モラルなど）、③外来語がさほど増加せず、優勢な類義語に及ばないもの（データ・デビュー・ビジネス・プロセス・インタビュー・プロジェクト・コンセンサスなど）、の3類に分けることができた。

このうち、外来語の使用が類義語を上回るものには、類義語にとってかわる可能性があるものも多いと考えられる。また、外来語の使用が類義語に近づいているものには、外来語と類義語とが、おそらくは何らかの形でその役割を分担するような関係にあるものも多いと考えられる。これら二つの傾向は、外来語の基本語化にみられる類型の一端を示すものと考えられる。

【基本語化の要因について】

個別の外来語・類義語の意味・用法について検討し、レジスターや年代の違いのほか、新聞が抽象的・一般的な外来語を必要とする背景に、それらが新聞の文章構成において「テキスト構成機能」と呼ばれる諸機能を果たしている可能性も提示した。

談話構成機能とは、ハリディとハッサン(1997)のいう「語彙的結束性」やマッカーシー(1995)のいう「談話構成語」などにかかわる機能である。たとえば、「テキスト内のある要素と、その要素の解釈に欠くことのできない他の要素との間の意味的な関係である」結束性の語彙的な表示である「再叙（語彙的指示の同一性）」には、同一語の繰り返し、同義語や近似同義語、上位語、一般名詞（general noun）、人称指示語などがあるとされる。調査対象のひとつである「トラブル」の基本語化には、既存の類義語群の上位語として、それらを範列的に概括する機能を獲得していることが作用し、継起的な概括機能はあまり関与していない。一方、「ケース」の基本語化には、一般語（general word）として、テキスト内の（主に先行する）表現を継的に概括する機能を発達させていることが作用し、範列的な概括機能はほとんど関与していないようである。現代新聞における抽象的な外来語の基本語化は、この二つの概括機能が、新聞テキストの概略化傾向に沿う形で作用し、進行しているものと考えられる。

【今後の課題】

形態素解析による簡易的な語彙調査にとどまっているものを、解析結果を整備するな

どして、その精度を上げる必要がある。また、上記と同様の語彙調査を、20世紀後半の日本語を反映した他のコーパスや語彙表データを利用して行ない、20世紀後半の日本語において基本語化した外来語を抽出する必要がある。コーパスとしては、「国会会議録」のほか、国立国語研究所を中心に構築された「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」など、語彙表データとしては、同じく国立国語研究所の「雑誌90種」および「月刊雑誌70誌」の語彙表のほか、「現代新聞3紙」「高校・中学校教科書」「テレビ放送」などの語彙表などが、利用できる。

最後に、抽象的な外来語の基本語化現象について、なんらかの一般的な傾向や類型がみられないかを検討し、また、その理論化を試みることによって、20世紀後半の日本語において、そうした基本語化がなぜ生じたのかを、総合的に明らかにしたい。上で述べた基本語化に見られる二つの傾向は、外来語の基本語化にみられる類型の一端を示すとも考えられるが、そのことを明らかにするためには、個々の外来語とその類義語との関係の推移を、それぞれの意味・機能を詳細に分析しながら、より具体的に把握する必要がある。

<引用文献>

- ・遠藤織枝ほか編（2006）『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』小学館
- ・金愛蘭（2011）『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- ・国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』国立国語研究所報 89、秀英出版
- ・M. A. K. ハリディ&ルカイヤ・ハッサン著、安藤貞雄ほか訳（1997）『テキストはどのように構成されるか：言語の結束性』、ひつじ書房
- ・M. マッカーシー著、安藤貞雄ほか訳（1995）『語学教師のための談話分析』、大修館書店

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①金愛蘭、外来語「ケース」の基本語化－類義語「事例」「例」「場合」との関係－、日語日文学、査読有、49巻、2011年2月28日、5～23頁
- ②金愛蘭、基本語化する外来語－談話構成機能に注目して－、日語日文学研究、査読有、75号、2010年2月28日、3～15頁
- ③金愛蘭、外来語の基本語化の研究－20世紀後半の新聞コーパスをもとに－、第3回博報「ことばと教育」研究助成研究成果論文

集、査読有、2009年9月30日、8-29頁、
優秀論文賞

- ④金愛蘭、日本語語彙における「外来語の基本語化」、日語日文学研究、査読有、69号、2009年5月31日、3~21頁

〔学会発表〕(計6件)

- ①金愛蘭、外来語動詞「チェックする」の基本語化—20世紀後半の通時的新聞コーパスを用いて—、「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」共同研究発表会、2011年4月23日、於国立国語研究所
- ②金愛蘭、基本語化する外来語—テキスト構成機能の視点から—、韓国日語日文学会2010夏季学術大会、2010年6月19日、於(韓国)慶北大学
- ③金愛蘭・石井正彦、外来語の基本語化と談話構成機能、特定領域「日本語コーパス」日本語学班研究会、2010年5月31日、於国立情報学研究所
- ④金愛蘭、20世紀後半の新聞における抽象的な外来語の基本語化傾向、日本語学会、2010年5月30日、於日本女子大学
- ⑤金愛蘭、新聞における抽象的な外来語の増加傾向とその要因、「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」研究発表会、2010年3月18日、於国立国語研究所
- ⑥石井正彦・金愛蘭、通時コーパスを用いた言語変化の多元分析—外来語出現率の二元分析を例に—、特定領域「日本語コーパス」日本語学班研究会、2009年8月28日、於大阪大学待兼山会館

〔図書〕(計2件)

- ①金愛蘭、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』、2011年2月28日、全175頁
- ②韓国日語日文学会(金愛蘭ほか19名)、『ここが違う!韓国語と日本語 韓国日語日文学会企画図書 日本語・日本語教育編』「日韓外来語の比較」を担当(27~43頁)、J&C出版、2009年12月17日、全293頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 愛蘭 (KIM ERAN)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：90466227

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし